

第三回 福原徹演奏会

徹の笛

徹君のリサイタルは、

毎回ユニークな演目と演奏によって

お客様に喜んで頂いておりますが、

今年は特にアツというような曲目で

私もとても楽しみです。

どうぞご期待下さい。

寶山左衛門



平成十八年度文化庁芸術祭参加公演

徹の笛

第三回福原徹演奏会

平成十八年十二月二日(木)午後七時 紀尾井ホール

助成 芸術文化振興基金

邦楽振興基金



後援 (財)日本伝統文化振興財団

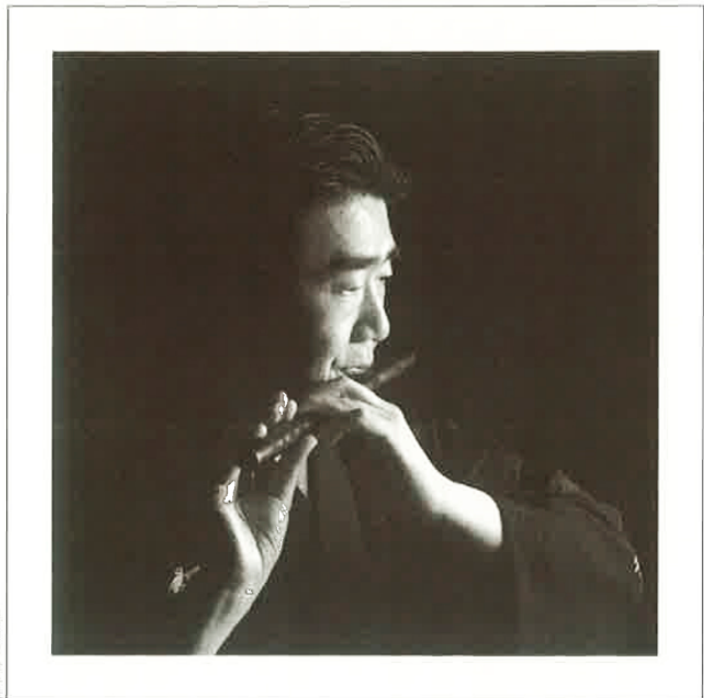


photo by Yamanoue

本日はお忙しい中、ご来場いただきまして誠にありがとうございます。

今から五年前、初回のプログラムに「笛には未知の可能性があると信じています…新しい笛の音楽を作るためには、まず演奏家自身が作曲し、演奏しなければと考えております」と書きましたが、その気持ちは今も変わっておりません。しかしそれ以上に、邦楽、あるいは音楽の現状に対する「危機感」のようなものが、私の中で高まり、純粹に音楽として感動できるものを目指したいという思いは、一層強くなるばかりです。

この演奏会も第三回を迎えますが、笛の魅力のアピールのみでなく、笛を通して音楽を見つめ直す事で(大変おこがましい言い方ですが)邦楽の発展、さらには新しい音楽の創造に、ほんの僅かでも寄与出来ないだろうか、と、真剣に夢見ております。

今回の演目は、今まで取り上げようと思いつつも躊躇していた曲を集め、冒険的なプログラムとなりました。これからも新しい試みが続けて行くつもりですが、この規模の会を私のような者が続けるには、このあたりが限界ですので、今回で一区切りとさせて頂こうと思います。皆様の厳しい御意見を、心より願っております。

今回も寶先生はじめ御助演者、スタッフの皆様のご尽力、そして多くの方々のお力添えを頂戴致しましたこと、誠にありがたく存じます。

また、文化庁芸術祭執行委員会、ご支援頂きました芸術文化振興基金、邦楽振興基金、日本伝統文化振興財団の各位にも厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが今日ご来場下さった皆様に、改めて御礼申し上げます。

本日はありがとうございました。

無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第二番より

シヤコンヌ
〔編曲初演〕

- 作曲Ⅱ J・S・バッハ
- 編曲Ⅱ 福原徹

笛 福原徹

チェンバロ 中川俊郎

地歌

ゆき

- 作曲Ⅱ 峰崎勾当
- 補曲Ⅱ 福原徹

笛 福原徹

藤囃子 寶山左衛門

福原賢太郎

休憩

男声独唱・笛・尺八のための三章

草の祈り
〔初演〕

- 作詩Ⅱ 蓬萊泰三
- 作曲Ⅱ 福原徹

独唱 小早川修

笛 福原徹

福原徹彦

福原寛

尺八 善養寺恵介

笛・太棹・ピアノのための

三重奏曲
〔改訂初演〕

- 作曲Ⅱ 福原徹

笛 福原徹

太棹三味線 鶴澤津賀寿

ピアノ 中川俊郎

「シヤコンヌ」

J.S. バッハ作曲／福原徹編曲

バッハの視線

●中川俊郎

ある人が、ある時偶然バッハの音楽を耳にし、とりになつてしまったとする。醇朴な気持ちで、是非バッハを演奏したいと思う。ところが、その人が手に持っている楽器がたまたま篠笛だったら……。このような場面に、私は数限りなく出くわした。私自身が、その当事者だったことすらある（自分の楽器であるピアノで、民族音楽を無理矢理演奏してみたり）。ここからドラマが始まるのだ。場合によれば、音楽を、世界を、何が何でも現状維持し、それどころか国境の壁を、更に厚くしようとしたがつている、怒りっぽい人達と戦わなければならなくなることもある。ところが、福原さんほどこうした戦いのイメージに、似つかわしくない人は、いない。実際、人と戦わない、というか戦うという言葉を、福原さん自身が持っている（これは、殆ど「神」だと言っているようなものだが……）。飄々と、悪い空気の間をすり抜けて行く。どこかで、バッハの視線を感じながら。

●福原徹

「通奏低音のないヴァイオリンのための六曲のソロ、第一巻、ヨハン・ゼバスティアン・バッハ、一七二〇年」という表題のある、バッハの美しい自筆譜。生き生きと踊るような、そして誇らしいような筆跡。その65年の生涯に彼は多くの名曲を生んだが、その中でもこの六曲は屹立し輝く金字塔のように見える。特にパルティータ第二番第五章「シヤコンヌ」(バッハはCiacconaと記している)は、ヴァイオリン奏者に限らず多くの人々に愛されており、ピアノ編曲をしたプラームスはじめ、この曲に魅せられた音楽家も少なくない。その構造は堅牢な城塞のようだが、情感豊かな暖かさに満ちており、奇跡としか言いようがない。

ヴァイオリンは「うたごころ」という点で、笛にとっても近い楽器だと思う。

昨年相談した時、「一緒にバッハと向き合いましたよ」と言ってくれた中川さんのチェンバロで支えてもらいつつ、刺激的な演奏を目指したい。

地歌

「ゆき」

峰崎勾当作曲／福原徹編曲

●寶山左衛門

今までいろいろな「ゆき」を吹いてきましたが、私としては胡弓と笛で演奏した時のことが強く印象に残っています。

今回は今までにない大冒険の試みです。私もお手伝いさせて頂くことになりました。

楽しみにしております。

●福原徹

地歌の名曲、古典邦楽全体の中でも屈指の名曲。「ゆき」は個人的にも非常に好きな曲で、いつか自分の会でと、ずっと思っていた。

一昨年、地唄舞の神崎舞一女氏から、笛だけで「ゆき」を舞いたいというお話を頂き、何度も試行錯誤を重ねて舞の地として吹かせて頂いた。その時は部分的に笛の二重奏にしたのだが、今回はもう一歩進めて、ソロで演奏する。

古典の美しい旋律に焦点を当て、笛の独奏で取り上げるという方法が、一つの「形」になるかどうか。

「シヤコンヌ」「ゆき」いずれも、本来は笛の曲ではない東西の名曲である。篠笛という素朴な楽器を通して歌うことにより、音楽の核心部分のようなものに少しでも迫りたいと思っている。

花も雪も払へば清き袂かな、ほんに昔の昔の事よ、
我が待つ人の我を待ちけん、鴛鴦の雄鳥に物思ひ
羽の、凍る衣に鳴く音もさぞな、さなきだに、心も
遠き夜半の鐘

聞くも淋しき独り寝の、枕に響く露の音も、もしや
といっそ寝きかねて、落つる涙の水柱より、辛き命は
惜しからねども、恋しき人は罪深く、思はぬ事の
悲しさに、捨てた浮き、捨てた憂き世の山かづら

(作詞：逢石庵別稿)

「草の祈り」

蓬萊泰三作詩／福原徹作曲

身内の兵士

●蓬萊泰三

●福原徹

「たとえば、死につつある兵士は、どうですかね」
テーマについて福原君はためらいもなくそう答え、
ほくも即座にうなずいた。そのときほくは、この
前の戦争で兵士として死んだ、五歳年上のいとこ
を思い出してもいた。

彼は、宝物のモーツァルトのレコードを聴いては涙
ぐむような、繊細で優しい若者で、父の頑迷さに反
発して家業の鉄工所を継がず、勘当された。そんな
彼にもやがて召集令状が届き、伯父は勘当を解い
て戦地へ見送ったが、一年もたたぬうちに、彼は二
十歳で戦死した。翌年失意のうちに伯父も死んだ。
古今東西を問わず、兵士たちの任務は、権力者
が決めた敵を殺すこと、つまり殺人である。六十年
あまり前、あのやさしかったといは、自分の死の直
前までに、何人をどのように殺したのか。そして、自
分はどんな殺され方をして、何を思つて死んだのか。
そんなかれが、ほくに問いかける。おまえなら、
どうする？

謡曲の声と笛という組合せにこだわりがあり、
古典の謡曲の一部を使い、そこに笛や他の楽器が
加わるという試みを続けてきた。

邦楽でシリアスなテーマを扱ったり現代を直接
表現することは難しい、とつい及び腰になるのだが、
今回は敢えて「テーマ性のある現代語による」作品
を作りたかった。その編成を考えている中で、以
前から頭の片隅にあった「笛と尺八による弦楽四
重奏のようなアンサンブル」というアイディアがこの
曲に不可欠に思えて来て、最終的に「テーマ性の
ある現代語による独唱（しかも謡の発声）と竹管
四重奏による音楽」という形に決まった。
詩は、NHK東京児童合唱団で歌っていた頃か
らお世話になっている蓬萊泰三氏に新たに書き下
ろして戴いた。現代語であること、そして時代や
地域を不定にして欲しいということを私からお願
いした。私が信頼する同世代の精鋭の皆さん方
の力を借りながら、新たな一歩を踏み出したい。

若い兵士

一、風

風が吹く
風が吹く
異国の果ての
戦火に焼かれた 野のはずれ
ひとり横たわる わたしの中を
風が 吹き抜けていく

野を 浸し
しかばねのわたしを 浸し
きのうも きょうも
肉を溶かし
骨を溶かし
わたしを 溶かしていく
泣く声が 聞こえる
黒い雨の はらかな奥から
母のすすり泣く声が
かすかに 聞こえてくる

異国の野のはずれで
わたしは 土に帰ろうとしている
空に満ちる星たちよ
無数のきらめきを わたしに注げ
その清浄な光によつて
どうか わたしを 原初の土に帰せ
どうか わたしを 無垢の土に帰せ

若い兵士

風の奥から
だれかが 呼んでいる
わたしを 呼ぶのは
だれか

母よ
あなたは わたしに教えた
生きるということは
いのちたちを 殺して食べ続けること
だから いのちたちを
むやみに殺してはいけない
そして 母よ
あなたは言った
兵士として駆りだされた
別れのあの朝
祈るように、わたしを見つめて
無言で 言った
死なないで
殺さないで

若い兵士
いつか
草たちが わたしを覆いつくすだろう
わたしは 草の茂みにならだろう
その日には
その日には
虫たちよ わたしの葉陰で いこえ
鳥たちよ わたしの上で うたえ
幼子たちよ わたしの花をつんで あそべ
娘たちよ わたしの花をかざして おしれ

若い兵士

ああ しかし
もう わたしには
答えるすべもない
わたしの声も
わたしの血も
土に吸われて 消えた
わたしは
すでに
しかばね

若い兵士
ああ しかし
わたしは 殺した
恐怖に駆られて
殺し続けた
幼子も殺した
娘も殺した
母親も殺した
若い兵士
ゆるしてください
どうか ゆるしてください

若い兵士
闇が 薄れていく
夜が 明けていく
いのちの芽生えに
朝の光がさそうとしている

若い兵士

雨
雨
硝煙と血のおいの染みだ
黒い雨が 降り続ける

若い兵士
星 星 星
満天の星の下

●蓬萊泰三(ほんらいたいそう) 脚本家
兵庫県生まれ。放送作品が、イタリア放送協会賞、文化庁芸
術祭賞(五回)、ギョラクシー賞、放送文化基金賞、などを受賞。
主な音楽作品に、オペラ「タロウの樹」(池辺晋一郎曲)、オペラ
「森」(鈴木輝昭曲)、バレエ「る」(三木隆曲)、合唱組曲「オテ」
、「い」(三善晃曲)、合唱組曲「青春」(野田暉行曲)、合唱組曲
「さようなら」(「信長賞賞曲」など)。

笛・太棹・ピアノのための

「三重奏曲」

福原徹作曲

●鶴澤津賀寿

「この三人、いいと思うんだよなあ、一人っ子だし。」と、稽古場で、徹さんがかばうようにおっしゃる。内心、「そんな光栄なこと」と感激しながらも、「一人っ子しかおおてないやんか!」とつつこむ私。それほど、徹さんと中川さんは、ピツタリ波長があつておられます。なにしろ、初対面で、バツハ等の話で何時間も盛り上がったとか。全然入つていけない私。ピアノの奏法など折にふれて中川さんに聞いて盛り上がっている徹さん。私が習っていた頃のピアノにはそんな奏法なかったなあ……入つていけない……

先日お二人のコンサートを客席で聞かせていただいて、「うわあ、ここに私が入るなんて……ぶちこわしだわ。」と……そう言つたら、お二人揃つて「なあに言つてんですか、引つ張つていくクセに!」とおっしゃる。

本日演奏する三重奏曲は、「二度ほど」壁」という題で演奏しています。この壁を越えるべく、私も精一杯演奏したいと思っています。

●福原徹

この作品は、一昨年十二月びわ湖ホール、そして昨年九月池上本門寺で演奏した「壁」という曲の改作で、さらに遡ると第二回のリサイタルで発表した「千年の桜」に現れる旋律が発点になっている。

この曲は、いつもこの三人で演奏して来た。そして演奏のたびに改訂を重ねてきたが、だんだん「壁」というタイトルに違和感を感じるようになって来た。三人の間にあった見えない壁が、いつの間にか本当に無くなつて来たということなのかも知れない。

笛と太棹、さらにピアノという編成は奇妙ではあるが、音域や音の性質をお互いに助け合う事ができ、三人という小さな編成であるにもかかわらず、大きな可能性を感じる。

新曲をこわごわ演奏するというのではなく、ある意味で古典を演奏するときと同じような感覚で、熱いセッションになることを願いつつ。

福原徹（ふくはらとおる）

一九六一年東京生まれ。四世宗家寶山左衛門（六世福原百之助 人間国宝）に師事。八三年福原徹の名を許される。八四年東京芸術大学音楽学部邦楽科を卒業。邦楽囃子笛方として長唄演奏会、舞踊会、放送、講演、海外公演などで演奏活動を続ける。「百笛会」を主宰、東京と浜松に於いて門弟の育成にも努める。清泉女子大学非常勤講師、静岡県立高校非常勤講師などを歴任。現在、NHK文化センター講師。社団法人長唄協会会員、創邦二二人、BIWAKOTOFUE同人。著書「やさしく学べる笛教本」（汐文社）。

また、作曲、新しい形の演奏会の企画構成などにも携わり、九七年自作作品集CD「徹」を発表。二〇〇一年第一回演奏会「徹の笛」（津田ホール）を開催、平成十三年度文化庁芸術祭大賞を受賞。〇二年より〇三年まで新作連続演奏会「徹の笛 in MUSICA SA」六回連続開催。〇四年第二回演奏会「徹の笛」（紀尾井ホール）を開催。

●第1回 福原徹演奏会

徹の笛 2001年10月26日（土）津田ホール

うた
長い旅（共演=笛：宮山安尚門）
義太夫 四寺小町（共演=三味線：竹本聡之助
三味線：鶴澤津賀寿、鶴澤寛也／囃子：福原毅太郎）
千の太陽、万の月（共演=笛：福原徹、福原徹
小鼓：藤倉内秀、福原徹一／大鼓：藤倉清之、望月大進之）

徹の笛 in Musicasa

Vol. I 2002年11月18日（月）ムシカーサ

篠笛独奏曲第1番
6枚のレンブラント テイトウスに捧ぐ
国境を越えて（共演=ピアノ：中川俊郎）
I 国境線 II 雲霧の如き III 度越えぬも枝 IV 海鏡 V 最後の国境

Vol. II 2003年1月20日（月）ムシカーサ

篠笛独奏曲第2番
6枚のレンブラント ヘテロの音詩
国境を越えて（共演=笛：宮山安尚門）
VI "I am"

Vol. III 2003年3月10日（月）ムシカーサ

篠笛独奏曲第3番
6枚のレンブラント イザワシハカ
国境を越えて（共演=笛：小早川悠）
VII 大開巻の花巻 VIII 春の夜の波も明けて

Vol. IV 2003年5月12日（月）ムシカーサ

篠笛独奏曲第4番
6枚のレンブラント 最後の自画像
国境を越えて（共演=小鼓：藤倉内秀／大鼓：福原毅太郎）
IX WAR X この水を飲んで下さい

Vol. V 2003年7月14日（月）ムシカーサ

篠笛独奏曲第5番
6枚のレンブラント 赤いテーブル
国境を越えて（共演=大鼓：三味線：鶴澤津賀寿）
XI 縁起 XII 始末

Vol. VI 2003年9月8日（月）ムシカーサ

篠笛独奏曲第6番
6枚のレンブラント 夜鏡
国境を越えて（共演=ピアノ：中川俊郎）
XIII 自題 XIV タンス・ダンス・ダンス

●第2回 福原徹演奏会

徹の笛 2004年4月3日（土）紀尾井ホール

キリエ（共演=唄：今泉政信）
聞奏曲（共演=笛：福原徹）
トナリノビス・バーチャム（共演=合奏：NHK東京児童合唱団）
トキ
千年の桜（共演=笛：小早川悠／太棹三味線：鶴澤津賀寿／ピアノ：中川俊郎）



中川俊郎（なかがわとしお）

一九五八年東京生まれ。作曲家・ピアニスト。桐朋学園大学音楽学部作曲科卒。作曲を三善晃、ピアノを末光勝世、森安禰子に師事。MUSIC TODAY 82 十周年記念国際作曲コンクール第1位。八八年村松賞、「アール・レスピラン」の一員として中島健蔵音楽賞。日本現代音楽協会理事、日本作曲家協議会会員。CMの世界でも奔走。病昂じてモダンダンスの舞台で女装し、トイピアノを演奏。



寶山左衛門（たからえんざゑもん）

一九二二年東京生まれ。父・五世福原百之助より歌舞伎・長唄囃子の指導を受け、笛方として活躍。六四年福原流家元六世福原百之助を襲名。八七年東京芸術大学音楽学部客員教授就任。この間、日本で初めての笛独奏曲の作曲、また五世百之助考案の篠笛音譜の完成などの功績が認められ、芸術祭大賞、モービル音楽賞、芸術選奨文部大臣賞、紫綬褒章等を受賞。九二年四世宗家寶山左衛門を襲名。九三年勲四等旭日小綬章受章。重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定される。社団法人長唄協会監事。本年十一月十八日国立小劇場に於いて「笛の会 寶山左衛門作品集」を開催。



福原賢太郎（ふくはらけんざう）

一九七五年 常磐津文字蔵（一中節家元、都一中）の長男として東京に生まれる。一九九一年 祖父である福原流囃子方、寶山左衛門に師事。同年、望月太喜雄に師事。長唄を東音浅見文子に師事。一九九三年 福原流笛方、福原徹に師事。一九九四年 NHK学園高等学校を卒業。以後、囃子方として邦楽演奏・舞踊会などで演奏活動を行うほか、レクチャーコンサートやワークショップ等の企画・公演なども行っている。本年十一月十八日をもって七世福原百之助の名跡を襲名。



小早川修（こばやかわおさむ）

観世流シテ方。日本能楽会会員。一九六一年 小早川泰士の孫として生まれる。浅見真高に師事。一九八四年 東京芸大邦楽科卒業。一九八六年 同大学院修士課程能楽専攻修了。一九六八年 「鞍馬天狗」花見で初舞台。一九七六年 「小袖曾我」で初シテ。「乱」「石橋」「道成寺」「翁」を披く。



福原徹彦（ふくはらてつひこ）

一九七三年 六代目 福原百之助（現 寶山左衛門）より笛の指導を受く。一九七八年 師より福原徹彦の芸名を許される。一九八一年 江戸囃子を若山胤雄に師事。三味線を東音 田島佳子に師事。一九八三年 東京芸術大学音楽学部邦楽科別科修了。一九八五年 NHK文化センター 青山教室篠笛講師に就任。一九九一年 東京芸術大学音楽学部講師に就任。一九九八年 国立劇場に於いて「第一回福原徹彦リサイタル」を主催。現在歌舞伎、日本舞踊、邦楽演奏会を主に活動している。



福原寛（ふくはらかん）

福原流笛方。人間国宝福原流宗家四世寶山左衛門に手ほどきより師事。一九九〇年 東京芸術大学音楽学部邦楽科卒業。一九九二年 同大学院修士課程修了。現在、各地にての笛リサイタル、歌舞伎、日本舞踊、長唄演奏会などの演奏活動の他、テレビやラジオ放送、海外演奏などにも参加。又、横笛「死の会」を主宰し、東京、名古屋、四国などで稽古場を開く。国立音楽大学講師。国立劇場養成課講師。一九九九年 第二回ジョイントリサイタル「笛と唄」にて名古屋市民芸術祭審査員特別賞受賞。CD「篠笛の曲」「笛、四季を綴る」著書：篠笛の本、篠笛曲集Ⅰ、篠笛曲集Ⅱ



善養寺恵介（ぜんやうじけんすけ）


六歳より、虚無僧尺八の手ほどきをうける。東京芸術大学大学院修士課程修了。学部、大学院を通して人間国宝、山口五郎に師事。一九九九年、独演会「虚無尺八」開催、現在に至るまで五回を重ねる。二〇〇〇年二月、尺八教則本「はじめての尺八」音楽之友社刊を執筆。二〇〇二年五月、ビクター財団賞受賞。一九九一年より東京芸術大学非常勤講師を勤めた後、現在、東京、埼玉、群馬を中心に尺八教授活動を行っている。




鶴澤津賀寿（つるさわつがじゅ）

女流義太夫三味線。一九八四年竹本駒之助に入門、三味線を四代目野澤錦系に師事。八六年鶴澤三生の幼名を継ぎ、初舞台。鶴澤重輝の預かり弟子となる。義太夫協会理事。女流義太夫演奏会、国立劇場主催公演などの舞台、NHKFM「邦楽百番」、TV「芸能花舞台」「いろはに邦楽」、テレビ朝日「菊次郎とさき」義太夫協力など、放送にも多数出演、協力。九六年度第四十七回芸術選奨文部大臣賞新人賞（古典芸術部門）、九七年度第十一回清栄会奨励賞、九九年度第四回ビクター財団賞「奨励賞」

第3回 福原徹演奏会「徹の笛」
平成18年11月2日(木) 紀尾井ホール

平成18年度 文化庁芸術祭参加公演 

助成=芸術文化振興基金 

邦楽振興基金

後援=(財)日本伝統文化振興財団

監修=寶山左衛門